

発信日時：

第1報_2025年8月21日 20:00

第2報_2025年9月1日 9:00

発行元：公益財団法人 知床財団

2025年羅臼岳登山道におけるヒグマ人身事故に関する調査速報（第2報）

本稿の位置づけと第2報の公表について

本速報は、2025年8月14日に北海道斜里町の羅臼岳登山道で発生したヒグマ人身事故について、8月20日に実施した現地調査等を踏まえ¹、現時点で知床財団が把握している事実関係を速報的にお知らせするものです。本速報は本件事故に関わる事実関係の整理と迅速な公表を目的としており、事故原因の特定や検証を目的としていないことにご留意下さい。

第1報の公表（8月21日）以降に明らかとなった情報や追加的な説明が必要と考えられる事象について整理し、第1報に追記（赤字で示す）する形式で第2報を公表するものです。なお、調査の進展にともない本速報の内容は修正される可能性があります。

1. 事故の概要と経過（既報の情報を含む）

2025年8月14日11時ごろ 羅臼岳登山道（岩尾別コース）を下山中の登山グループ（2名パーティ）のうち1名（以下、被害者という）がヒグマに襲われたとの通報が警察に入る。通報者は、被害者の同行者。知床連山登山道全線を閉鎖とし、同日より警察を中心とした搜索救助活動を開始。

翌8月15日の搜索活動において、登山道近傍の林内で被害者に接触している0歳2頭連れ親子のヒグマを発見（計3頭、捕獲個体という）。その場でヒグマ3頭を銃により捕殺。被害者は、その後、病院に搬送され死亡が確認された。

捕獲個体と本件事故との関係を分析するため、北海道立総合研究機構（以下、道総研）がDNA分析を実施。被害者の遺留品等から採集した体毛および唾液から抽出したDNAと、捕獲個体から採集した肝臓のDNAが一致したと発表（8月19日北海道庁プレスリリース）。

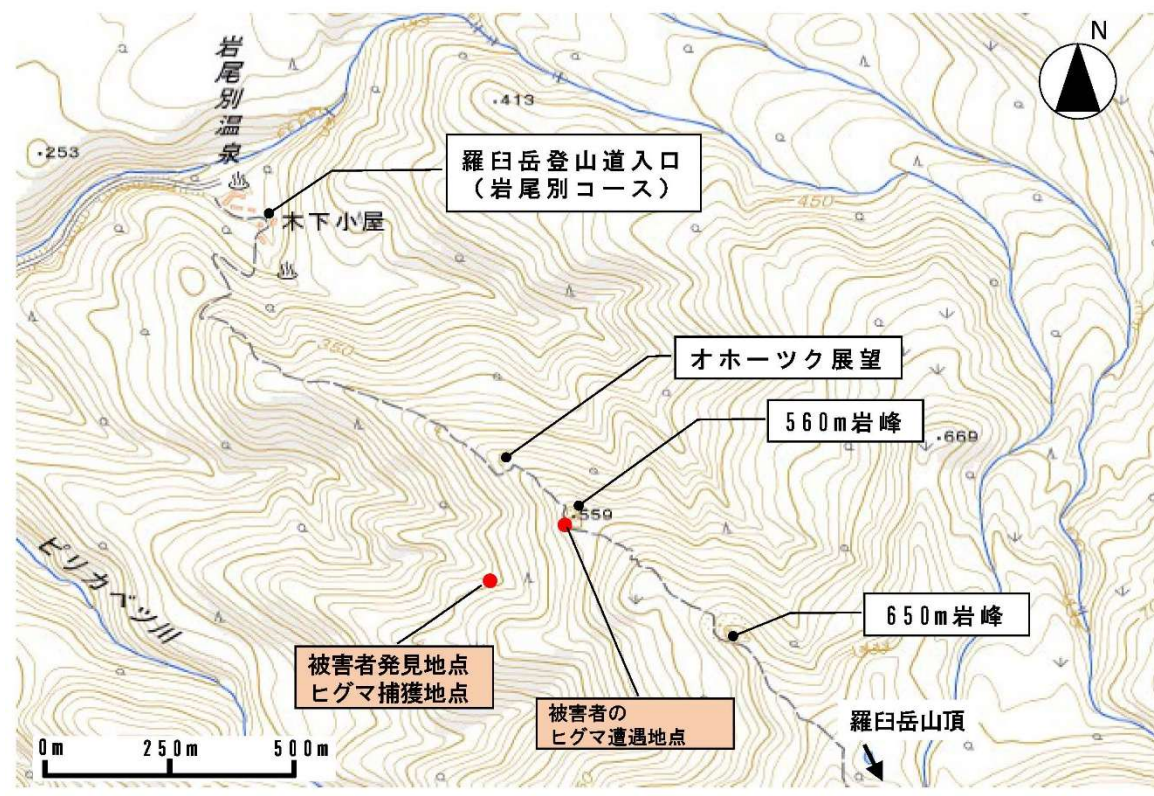
8月20日に事故調査を目的とした現場検証を関係行政機関および知床財団で実施し、登山道上でのヒグマと被害者の遭遇地点を特定。そこから谷側に下った林内でスマートフォンなどの遺留品やヒグマの体毛を追加で発見し回収した。

なお、登山道の閉鎖措置は継続中。9月1日現在、本件事故による2次的な被害は確認されていない。

¹ 対策本部による情報、関係機関等による聞き取り情報、現地調査等より知床財団がまとめたもの

被害者情報：東京都在住 26歳男性

事故発生場所 被害者のヒグマとの登山道上遭遇地点：下図の通り



2. 事故現場の環境と発生時の状況

現地調査と道総研による聞き取り調査²から以下のことが明らかとなっている。

事故現場の環境

- 被害者がヒグマと遭遇したと思われる地点は、岩峰（通称560m岩峰）の南側を巻くように登山道が配置された狭隘な区間に位置する。事故現場は、山頂方面から登山口に向かって進むと岩峰の陰で見通しが悪い地点である。
- 560m岩峰付近は、夏季にはヒグマのエサとなるアリが恒常的に発生する場所であり、アリの摂食を目的としたヒグマの出没が多発する場所として知られている。8月15日の現地搜索時、および8/20の事故調査時においても多量のアリの発生を確認している。
- 事故発生時の天候は曇り。現地の風速等は不明。

² 道総研によるDNA分析や聞き取り等の調査は、北海道からの依頼により実施

事故発生時の状況

- 事故発生時、周囲に同行者および第三者はおらず、ヒグマによる被害者への攻撃の瞬間は誰も直接目撃していない。
- 被害者は同行者から離れ、先行して単独で走って移動していた可能性が高い。同行者と~~の距離~~や被害者の移動速度などは不詳であるが、登山全体の行程から類推してもかなり早いペースで下山していたと推定される。

第2報追記：事故発生時の被害者と同行者の距離は200m程度と推定される。なお、被害者は当日、いわゆる「トレイルランニング」と呼ばれるスタイルで登山していたという情報はない。

- 被害者はクマ鈴を携行していた。被害者自身のクマスプレーの携行や使用に関する証拠は確認されておらず、不明である。
- なお、同行者は「クマよけスプレー」と謳っている商品を所持していたが、ヒグマに対応した製品ではなく、かつ再利用品であった。事故発生時の初期対応において使用を試みたが、噴射できていない。

第2報追記：同行者が所持していたのは、使いかけのものであり、かつ、使用履歴が不明だったとの情報が得られているが、現在詳細を調査中である。

事故発生後の状況

- ~~被害者は、ヒグマと遭遇した際に攻撃を受け、その後、事故現場より南側の林内にひきずりこまれたと推察される。~~
- 遅れて現地付近に到着した同行者が被害者の助けを呼ぶ声でヒグマに襲われている被害者を林内に発見し、応戦と救助を試みたが、ヒグマは被害者から離れなかったため、携帯電話の通じる登山道上に移動し、警察へ通報を行った（通報時間11：10）。
- 登山道上の遭遇地点から同行者が襲われている被害者を目撃、応戦した地点までの経過については、現時点では詳細不明である。
- この際、同行者が確認したヒグマは1頭との情報であった。

第2報追記：同行者はオホーツク展望で救助を待っている間に、登山道を下ってくるヒグマ1頭を目撃した。体サイズ等の情報から、この個体は加害個体と同一である可能性がある。

3. 捕獲個体の情報および加害個体との関係性

捕獲の状況

- 8月15日13時06分頃、被害者を咥え、引きずりながら斜面を移動する2頭の子を連れた親子ヒグマを捜索救助隊が発見。最初に母グマに発砲し捕殺、その後、ほぼ同地点で子グマ2頭に発砲し、2頭の子グマの死亡も確認した。
- 捕殺したヒグマはヘリコプターにより搬送され、同日中に解剖調査を実施。DNA等のサンプリングが行われた。

捕獲個体の情報

解剖調査とDNA分析等の結果により判明した捕獲個体の情報は以下の通り。

- 母グマ（メス、11歳、体重117kg、体長140cm）
- 子グマ（メス1頭、オス1頭、ともに約0歳、体重17kg/17kg、体長72cm/71cm）

捕獲個体と加害個体の関係

- 既報の通り、被害者の着衣および遺留品に付着したヒグマの体毛や唾液から抽出したDNAと、捕獲個体から採集した肝臓のDNAが一致していることが確認されている。

第2報追記：8月20日に実施した現地調査において登山道上のヒグマとの遭遇地点特定し、同地点から谷側に約10メートル下った林内（登山道外）で、新たに遺留品とヒグマの体毛を発見し回収した。回収したヒグマの毛と、遺留品から採取したヒグマの毛および唾液を試料として追加的にDNA分析を実施した結果³、捕獲個体のDNAと一致した。

- ~~また、今回実施した事故調査において実施された一連の~~DNA分析において、捕獲個体以外のヒグマのDNA情報は検出されていない。搜索救助、現場検証等の事故調査においても、捕獲個体以外のヒグマが今回の事故に関与した客観的な情報は得られていない。

捕獲個体の識別

捕獲個体のDNA情報と外見的特徴から個体の識別を実施した。過去のヒグマ対策記録やDNA調査により把握している個体情報と突合した結果、以下のことが明らかとなった。

- 捕獲個体は、2014年（出生年）から知床国立公園で毎年のように目撃されてきた。特に、岩尾別地区を中心に活動しており、今年度も5月頃から同地区を中心に目撃されており、2頭の出生も確認されていた。
- 捕獲個体は、国立公園内の道路沿線など人目につく場所で繰り返し目撃されており、今年に入り当該親子グマと思われるヒグマの目撃情報が30件以上寄せられていた（道路沿線での最後の目撃は8月8日）。
- なお、8月10日には羅臼岳の登山道付近で当該親子グマと思われるヒグマの目撃情報が登山者より寄せられている（注1）。
- また、「人を避けない。人に会ってもすぐに逃走しない。」といった行動段階1から1プラスに該当する行動（注2、注3）が度々確認されており、これらの行動を抑止するため、捕獲個体への追い払い対応（忌避学習付け）を繰り返し行ってきた経過がある。
- 捕獲個体に関して、餌付けされたかのような情報が一部で出回っているが、知床財団および行政機関ではそういった事実は把握していない。

第2報追記：7月29日に岩尾別地区においてヒグマへの餌付けが疑われる事案が発生しているが、捕獲個体との関係性は不明である。

- 一部報道において当該個体の愛称・呼称に関する記事があるが、知床財団および行政機関がそのような愛称・呼称を用いた事実はない。

第2報追記：調査や管理の目的に応じてヒグマには識別記号が付与されることがある。なお、捕獲個体の識別記号はSHである。

³ 北海道の依頼により、道総研がDNA分析を実施

注1：道路沿いなどの低標高で活動するヒグマが夏季に山岳地域に移動することは一般的な行動。

注2：[知床半島ヒグマ管理計画](#)に基づくヒグマの行動段階の区分による。

注3：「人を避けない。人に出会ってもすぐに逃走しない」ヒグマは知床半島全域で多数確認されており、捕獲個体の際立った特徴とはいえない。

4. 事故発生以前に登山道で確認された要注意事例と本件事故の関連性

羅臼岳登山道でのヒグマ目撃情報は例年多数寄せられており、今年度の目撃情報の件数は平年並の水準だった。一方、8月10日より以下の事例が発生しており、要注意事例として詳細把握に努めるとともに、警戒情報等の発出を行っていた。

- 8月10日：

岩尾別コースの 銀冷水（1,040m）～大沢（1,120 m）間の登山道上で**0歳の子グマ2頭を連れた親子グマ**が目撃される。この親子グマは利用者を気にせず登山道を登ってきたため、登山者（別パーティのガイド含む）がクマスプレーを構えて後退する事態となった（スプレー噴射なし）。提供写真による外見上の特徴から、この親子グマは今回の捕獲個体と同一である可能性が高いと推察される。

- 8月12日：

弥三吉水間（780m）～ 銀冷水（1,040m）の登山道上で単独の成獣サイズのヒグマ（外見特徴：濃茶色、体毛長め）が下山中の登山者によって目撃された。目撃者に接近したことからクマスプレーが使用されているが、使用量は微量である。この個体は目撃者から一時離れたものの、遭遇から退避まで約5分間にわたり接近と離反を繰り返す行動を見せた。後日、目撃者から「報道で見た8月10日に羅臼岳で目撃されたヒグマの特徴と似ていた」との情報提供があった。

5. 登山道等を対象とした情報提供・管理活動の実施状況

日常的なヒグマ情報の発信

- 登山道を含めたヒグマの目撃情報、注意喚起情報、基本的な対処法については、webサイト（[知床のひぐま](#)）やSNS等で継続的に発信している。
- 知床自然センター等の国立公園内のビジターセンター、岩尾別登山道の入口にある木下小屋などでは主に登山者を対象としてクマスプレーのレンタルを実施しており、レンタルにあたっては、使用方法やヒグマ対処法のレクチャーを併せて行っている。
- 岩尾別コースの登山口においては、登山道沿線でのヒグマ目撃情報を登山者から収集しているほか、収集した目撃情報を登山口の地図上に掲示する取組みを継続的に実施している。

要注意情報の調査と発信

- 警戒・注意の必要な事象が発生した際には現地調査や聞き取り調査を行い、上記webサイト等で警戒をよびかける情報を発信している。
- 8月10日、8月12日の要注意事例の発生に際しては、webサイトとSNSで注意情報を発信するとともに、8月12日午後には登山口に「要注意ヒグマ目撃情報」を示す[注意喚起看板](#)を掲示した。
- 8月13日には環境省職員、斜里町職員、知床財団職員が登山道のパトロールを実施し、登山者への聞き取りも行ったが、危険事案に関連する情報は得られなかった。

6. 本件事故を受けた今後の検証や取組みについて

今回の事故は、ヒグマの保護管理に取り組んできた知床財団としても重大かつ深刻な事案であると受けとめています。社会的な関心も高く、知床においても地域の環境保全、観光利用、住民生活等のあり方に大きく影響する事案と考えます。今後の事故検証、再発防止等の取組み、登山道の利用再開の判断等については、関係行政機関を中心に検討が進められる予定です。知床財団はこうした取組みに協力し、必要な情報を提供するとともに、今後の安全対策や利用のあり方について積極的に提言していく所存です。

本件に関するお問い合わせ先：

公益財団法人 知床財団 事務局長 玉置 創司（たまき そうし）

【電話番号】 0152-26-7665 【E-Mail】 info@shiretoko.or.jp
